江口 直光（Naoaki EGUCHI）

学位：修士（学術）

略歴：東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了

東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学（単位取得退学）

専門分野：ドイツ文化研究、表象文化論

研究課題：1. リヒャルト・ワーグナーを中心とする音楽劇

2. ヴァイマル期ドイツを中心とする映画

【著書】

・『ワーグナーシュンポシオン 2022』（共著、アルテスパブリッシング、2022 年 7 月）

・『知ってほしい国ドイツ』（共著、高文研、2017 年 9 月）

・『アプファールト〈ノイ〉— スキットで学ぶドイツ語』（共著、三修社、2015 年 2 月）

・『ワーグナー事典』（共著、東京書籍、2002 年 3 月）

【翻訳】

・クリスティアン・マルティン・シュミット著『ヨハネス・ブラームスとその時代』（西村書店、2017 年 11 月）

・バリー・ミリントン編著『ヴァーグナー大事典』（共訳、平凡社、1999 年 3 月）

・ジム・サムソン編『西欧の音楽と社会第 8 巻　市民音楽の抬頭』（共訳、音楽之友社、1996 年 5 月）

・ジム・サムソン編『西欧の音楽と社会第 9 巻　世紀末とナショナリズム』（共訳、音楽之友社、1996 年 12 月）

【論文】

・「アニメ『アルプスの少女ハイジ』のオープニングとエンディングにおける映像と音声の相互作用」（愛知文教大学学術委員会編集・発行『愛知文教大学論叢』第 22 巻、2019 年 11 月）

・「映画『ニーベルンゲン』とワーグナー」（『ワーグナーシュンポシオン 2018』アルテスパブリッシング、2018 年 7 月）

・「映画『ニーベルンゲン』第 1 部におけるジークフリート像再考」（愛知文教大学国際文化学会編集・発行『愛知文教大学比較文化研究』第 14 号、2016 年 11 月）

・「ジャック・オッフェンバックの《地獄のオルフェ》と《美しいエレーヌ》— 哄笑から陶酔へ —」（愛知文教大学学術委員会編集・発行『愛知文教大学論叢』第 17 巻、2014 年 11 月）

・「愛と権力のアンチノミー — 《ニーベルングの指環》に関する一考察 —」（愛知文教大学学術委員会編集・発行『愛知文教大学論叢』第 13 巻、2010 年 11 月）

・「オルトルートは何者か —《ローエングリン》詩論」（愛知文教大学学術委員会編集・発行『愛知文

教大学論叢』第 11 巻、2008 年 11 月）

・„Kandinskys Idee der Kunstsynthese und seine Wagner-Rezeption" („Medien und Rhetorik:Grenzgänge der Literaturwissenschaft. Beiträge der Tateshina-Symposien 2000 und 2001, herausgegeben im Auftrag der Japanischen Gesellschaft für Germanistik von Tetsuro Kaji u.a.", Iudicium-Verlag, 2003.）

・「愛知文教大学のドイツ語教育」（愛知文教大学学術委員会編集・発行『愛知文教大学論叢』第 5 巻、2002 年 11 月）

・「《きよしこの夜》考 ― その起源と伝承」（愛知文教大学国際文化学会編集・発行『愛知文教大学比較文化研究』第 3 号、2001 年 11 月）

・「《神々の黄昏》― 削除されたブリュンヒルデの詩句」（愛知文教大学学術委員会編集・発行『愛知文教大学論叢』第 1 巻、1998 年 11 月）

【研究発表】

・„Juden als Fremdbilder in den Musikdramen Richard Wagners."（日本独文学会主催アジア･ゲルマニスト会議 2008、於：金沢星陵大学、2008 年 8 月 28 日）

・„Hoch- und volkskulturelle Elemente bei der Festspielidee von Richard Wagner "（日本独文学会・ドイツ学術交流会共催第 46 回文化ゼミナール、於：アートランドホテル蓼科、2004 年 3 月 16 日）

・「カンディンスキーの舞台作品」（ポスター発表、日本独文学会 2003 年度春季研究発表会、於：武蔵大学、2003 年 5 月 31 日）

・「ワーグナーとカンディンスキー」（日本ワーグナー協会第 229 回例会、於：東京芸術劇場、2002 年 11 月 23 日）

・「カリキュラム改編と外国語教育 ― 愛知文教大学の場合 ―」（ドイツ語教育研究会第 84 回例会、於：ゲーテ･インスティトゥート東京、2002 年 7 月 19 日）

・„Die Idee des Gesamtkunstwerks von Kandinsy und seine Wagner-Rezeption."（日本独文学会・ドイツ学術交流会共催第 42 回文化ゼミナール、於：アートランドホテル蓼科、2000 年 3 月 21 日）

【その他】

・公益財団法人日本高等教育評価機構大学機関別認証評価評価員（2017 年 4 月～2018 年 3 月、2019 年 4 月～2020 年 3 月、2022 年 4 月～2023 年 3 月）

・「ヨーロッパ、ユーロ、クリスマス」（高大連携事業、於：高松学園伊那西高等学校［オンライン］、2021 年 12 月 9 日、2022 年 11 月 10 日）

・「EU とは何か」（出張授業、於：岐阜県立瑞浪高等学校、2019 年 11 月 18 日）

・「ドイツ語入門」、「ドイツのクリスマス」（出張授業、於：愛知県立豊田東高等学校、2018 年 11 月 12 日）

・「ドレミと ABC」（愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2016 年 4 月）

・「ドイツ語入門」（出張授業、於：瀬戸北高等学校、2015 年 7 月 8 日）

・「ドイツ語ってどんな言葉？」（出張授業、於：瀬戸北高等学校、2015 年 1 月 26 日、6 月 15 日）
・「バッハは聖書をどう読んだか？」（愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2015 年 1 月 15 日）
・第 12 回日本独文学会賞ドイツ語部門選考委員（選考委員会、於：関西大学、2014 年 10 月）
・「さすらい人の歌」（愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2013 年 11 月 21 日）
・日本ワーグナー協会主催リヒャルト・ワーグナー生誕 200 年記念懸賞論文審査委員（審査委員会、於：国際文化会館、2013 年 7 月）
・小牧市文化振興推進会議委員（2013 年 7 月～2017 年 6 月）
・「ライン川の流れと音楽」（愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2013 年 1 月 17 日）
・「モーツァルト・アッラ・トゥルカ」（かすがい熟年大学生活コース、於：春日井市民会館、2012 年 7 月 4 日）
・『「忘れるものは幸いである」― ウィンナ・ワルツの美学 ―』（愛知文教大学公開講座、於：愛知文教大学国際交流会館、2010 年 1 月 21 日）
・「リートでたどるドイツの四季（1)」、「同（2)」（小牧市民大学講座、於：小牧市公民館、2008 年 2 月 2 日/3 月 8 日）

令和 5（2023）年度ティーチングポートフォリオ

氏　名	江口直光	職位／役職	教授／副学長・人文学部学部長

1. 教育の理念

愛知文教大学は「質実有為で宗教的情操を身につけた真人の育成」という建学の精神を、グローバル化する現代社会において一生を生き抜く強い心とそれを助ける社会力を養成するという現代的理念として継承しており、この理念にもとづき、人文学部人文学科では、急激に変化する現代社会を生き抜いていく人材を育成するために、意思伝達の道具としての言葉を社会や文化とのかかわりから問い直した「ことば」を学修基盤として教養教育を展開している。本学が掲げるこのような方針を踏まえ、私は「ことば」をさまざまな記号が織りなすネットワークととらえ、記号のネットワーク＝「ことば」の読解を通じて社会・文化現象を読み解く力を養成することを。自身の教育活動における理念とする。それは、本学の教育目的である「真のコミュニケーション力の養成」に通じると考える。

2. 教育活動の内容

①愛知文教大学における担当科目

令和 4（2022）年度：ドイツ語入門、ドイツ語初級、ドイツの言語と文化、ドイツの言語と社会、映像文化論、欧米の文化、欧米の思想、ことばと人文学、アカデミアゼミ A, B, C, D、比較文学文化論 B（大学院）

令和 5（2023）年度：ドイツ語入門、ドイツ語初級、ドイツの言語と文化、ドイツの言語と社会、映像文化論、欧米の文化、欧米の思想、ことばと人文学、ことばと文化 ― 日本と世界、アカデミアゼミ A, B, C, D、語学研修（引率）、比較文学文化論 B（大学院）

②高大連携事業

「ヨーロッパ、ユーロ、クリスマス」（於：高松学園伊那西高等学校［オンライン］、2022 年 11 月 10 日）

3. 教育の方法

記号のネットワーク＝「ことば」の読解を通じて社会・文化現象を読み解く力を養成するという教育の理念を実現するためには、教員の適確なナビゲートによって科目履修者が主体的に学修に取り組む環境を創出することが必要である。そのためにアクティブラーニングの一環として ICT を活用し、Google classroom を通じて提出された課題に教員がコメントを加えて返信するというかたちで双方向のやりとりをつねに行なっている。また、とくにアカデミアゼミでは全履修者によるディスカッションを重視している。

なお、アクティブラーニングについては特定の形式が用いられているかどうかという指標だけで判断することはできず、学修者の「アクティブ」な学修をいかに実現できるかにかかっていると考える。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

令和4（2022）年度に担当した科目では、授業調査アンケートの結果および各種課題や定期試験結果

を総合した成績評価から判断して、各科目において当初掲げた学修目標は達成できたと考える。

個々の科目については、「映像文化論」と「欧米の文化」では履修者数が想定を大幅に上回り、授業中の秩序維持と課題のフィードバックに苦労した。いずれも必修科目ではないため、履修者数を事前に予測することは難しいが、どのような状況にあっても学修目標の到達を実現できるよう、臨機応変の対応を心がける。

新規科目として開講・担当した「ドイツの言語と文化」および「ドイツの言語と社会」では、科目名に「言語」が明記されているにもかかわらず、「言語」の要素が希薄になったことは否めない。令和5（2023）年度にはこの点を是正して臨む。また、やはり新規に担当した大学院の科目「比較文学文化論B」では、人文学部の授業と同様に講義形式でGoogle classroomを通じた双方向のやりとりを中心とする授業を行なったが、大学院生の特性に鑑み、取り上げるテーマに関する論文の輪読などを取り入れていきたい。

5. 今後の目標

教育の理念およびそれを実現するための教育の方法はおおむね問題ないと考えるため、科目ごとの個別の状況に応じて細部を臨機応変に修正して臨む。なお、生成 AI の急速な普及によって大学における教育活動も変容を迫られることになるだろう。生成 AI の社会における動向を注視し。自身の教育活動に適確にフィードバックしていきたい。